令和6年度 学校評価報告書 【国立市立国立第四小学校】

学校教育目標	○よく考え進んで学ぶ子 ○自分も友達も大切にする子 ◎正しく判断し行動できる子 ○体を鍛え最後までやりぬく子	重点目標	◎正しく判断し行動できる子
--------	---	------	---------------

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	最終評価	分析	改善策(次年度に向けて)	学校関係者評価		
○よく考え進んで学ぶ子 ○自分も友達も大切に ◎正しく判断し行動できる子	確かな学力の向上を目指す 思いやりを大切に する教育の推進 豊かな言語環境の整備を進める	学習規律の確立	自分の考えを発表する機会を意図的な設定(教務)	「自己表現」ができる児童を80%以上にする。	A	2回目のアンケートでは、自分の考えを伝える場面をペア、グループ等も含めると伝えたため、肯定的意見が増えたと思われる。また、学級活動の研究を行っているため、意見を発表する機会が多かったと考える。	引き続き自分の考えを伝える場面を多く設定し、ペア、グループ等で考えを伝えることも素晴らしいことであると児童に話していく。次年度は、研究との関連をより明確にして、主体的に自分の考えを表現できる子を育てていく。	自分の意見を述べるために必要な、まとめる力を付け、要点を相手にわかりやすく伝えられるようになってほしい。自己表現の機会が多くなり児童の意見等が発言しやすい環境が維持できていると考える。児童が自らの考えをまとめ言葉に変えることは、少しずつ思いを外に出すことを繰り返すことでより形になっていくと思う。引き続き何らかの表現をする道筋を周囲で探していけると良いと思う。		
			対話的な活動の意図的な設定(研究)	「話をよく聞く」ができる児童を80%以上にする。	A	「そう思う・ややそう思う」児童が95→92%と微減だが、90%以上を維持している。8% (25名程度)の児童は「あまり思わない・思わない」と思っている。2学期も対話活動を多く設定しているために高い肯定的評価になっていると考える。	高い達成状況を継続するために、引き続き対話的な活動を意図的に設定していく。「よく聞く」とはどんな状況か、態度面や内容理解の面などで具体的に児童に示し、指導していく。	聞く姿勢を取り、対立する意見でもゆっくり終わるまで聞いてから、必要があれば自分の意見を述べる対話形式が望ましく感じる。グループ形式での授業参観などさせていただき、児童同士の対話活動は良好に維持されていると感じた。各クラスの授業を見学したが、みんなの顔が先生に向いていて、集中していた。児童たちの生き生きとした表情がとても印象的だった。この学校評価の中でこの項目は、100点満点だと思う。		
		授業改善	問題解決的な学習過程を重視した授業実践。(教務)	児童が「めあて」と「振り返り」を意識して授業を受けている。 目標数値・・・90%	C	学年ごとに差が見られた。教員が意識できていた学年は、肯定的評価が増えている。2学期、運動会、音楽会と行事がある中で、学習内容も多くなり、振り返りの時間が確保できなかったのではないかと考える。各教科の特質に応じた、めあての設定、振り返りのとり方が十分に理解できていないのではないかと考える。	各教科担当に、めあて、振り返りの仕方を紹介してもらって時間を作る。学力調査の分析を教職員で行い、その時間等に、めあて、振り返りの設定の仕方を教職員で学んでいく。	低学年では「めあて」や「振り返り」が理解しにくく、工夫がさらに必要と考える。デジタル教科書を使った書写の授業を参観したが、ひらがなの指書き学習で、親指で書いている児童が複数いた。指書きは本来、正しい筆順と運筆(鉛筆の動かし方)を学ぶ学習だと思うので、機能性の高い人差し指を使うのが基本ではないか。黒板の横にめあて、振り返りの欄があれば毎時間の授業で意識できるが毎回、書き方提示の仕方が変わると分かりにくい。		
		読書活動の充実	定期的な読書の取組や読み聞かせを通じて、本に触れる機会を意図的な設定(図書)	本に親しむことで、読書好きの児童を80%以上にする。	A	全体的に大きな変化はなく、依然として児童と保護者・地域では、肯定的な回答の割合に乖離があった。	引き続き様々な本に触れる機会を増やすとともに図書室で借りた本の持ち帰りを推奨し、家庭でも読書に取り組みるようにする。	総合的には、良好な環境が維持されている。デジタル時代における読書は想像力育成などに必要な活動だと思う。図書室周りの本の紹介等、とても見ごたえがあり、興味をそそられるのもとてもよい。週に一度学級だよりを出していると同った。その記事に児童や担任、保護者からのおすすめ本を掲載するなどの工夫していくとよい。		
		たてわり班活動の充実	たてわり班活動の実践(特別活動)	居心地のよさを感じながら、たてわり班活動に参加している児童を80%以上にする。	A	児童・教職員・保護者共に肯定的な回答が80%を超える結果であった。しかし、1学期末の結果と比較すると、肯定的な回答がやや減少傾向にある。2学期になり行事が多く、毎週の四友の活動が充実しにくい傾向にあったのか、2学期の年度半ばという時期的な性質なのか、四友の活動自体に課題があったのか要因は様々考えることができる。	①リーダーの移行時期の統一 リーダーの責任感は班の活動の充実感を左右する。リーダー移行時期を狭めて設定する必要がある。(2学期からリーダーを5年生に移行していた班があったため) ②振り返りの充実・6年の担任任せでなく、班の担当と6年生が連携する必要がある。	地域の見守り活動時の班構成にも表れたおり、リーダー意識の継承など活動の成果が確認できます。中休みで、縦割りの児童と大縄跳びをしたりしているが、同学年ではできないような遊びもでき、楽しそうだし、仲間外れもないように思われる。朝の登校班でもいえるが、上の学年の責任感とグループの協調性が育まれて、よい企画だと思う。		
		言語環境の整備(生活指導)	時と場に応じた言葉づかいができる児童を80%以上にする。	A	年度当初より児童、保護者・地域の肯定的な回答が下がっている。児童は、当初の緊張感より馴れが生じていることが考えられる。	昼の会で月目標に合わせて全体指導を通して、児童の実態に合わせて具体的にどのような姿が望ましいか指導する。	学年ごとに、成長に従い言葉づかいも変わらと思うが、やはり生活環境が基本と考える。児童に時と場に応じた言葉づかいを教えるには、大人の側もそれなりに相応しい言葉づかいで接する必要がある。時と場合の感じ方は、体験を通して身に付けていくものだと思える。コミュニティスクールとなりその機会も増えてくる。長い目で見守りたい。			
		「道徳の時間」の充実	あいさつの励行(生活指導)	児童の自己評価による「あいさつ」の励行を90%以上にする。	B	児童、保護者・地域、教職員全体的に肯定的な回答が下がっている。実態としては、年度当初とあまり変化していないようにも見える。	あいさつ運動や昼の会での全体指導だけでなく、普段の授業でも具体的な姿を称賛するようにし、継続してあいさつする態度を育てる。	登下校時のあいさつにはじまり、地域の人間としてこちらも清々しい気持ちで挨拶を交わしている。学校訪問時に児童から挨拶され気持ちが良い。挨拶は、何のために行うのか理解できていないように思える。朝の見守りの際にも、声を出して挨拶する子、顔を見て会釈をする子、下を向いて会釈する子、友達と話をしながら、通り過ぎる子、こちらから挨拶しても全く無視して行く子など様々である。相手との関係性もあるので、まずは、関係性を作り、挨拶はそれからのような気がする。		
		道徳的実践意欲(生活指導)	「学校の決まりを守る」児童を80%以上にする。	A	児童、保護者・地域はあまり変化がないが、教職員の肯定的な回答が24%ほど下がっており、指導についての困り感が表れている。	生活指導部で11月にきまりを意識し直す取組を設定し、虎の巻を再度配布したり、改めて意識すべき内容について指導したりするようにする。	実際に接している教職員の評価から推し量ると、一層の努力を期待する。こうした評価をする姿勢は、時として悪いところを探す行為になってしまうかもしれない。一息入れてから児童も教職員も考えると、次への提案が思いつくかもしれない。虎の巻をちゃんと読んでいない保護者が多いと思う。児童にも保護者にも一緒に見てもらうことを促すとよいと思う。			
		○体を鍛え最後までやりぬく子	健康への関心と実践力を高める	体力の向上を目指す	健康的な体作りや体育授業の充実(保健体育)	体幹の強化…正しい姿勢で座ることのできる児童を90%以上にする。	C	大人と子供の正しい姿勢や姿勢を保持している時間の認識の差があり、保護者や教職員の数値が下がっている傾向がある。正しい姿勢に関する指導を続けたことで、児童の自分の姿勢に関する意識が高まり、自分の姿勢を客観的に見て「あまりそう思わない」が増えたと考える。	月目標や体育委員会からの呼びかけなど、引き続き児童の意識を高めていく。掲示物や合言葉などで全学年一貫した正しい姿勢の指導ができるとよい。	子供のうちは健康に対する意識が低く、いわゆる運動神経(体育などのスポーツ)が良いことに目が向かいがちだと思われるが、体調を崩さないことなどにも繋がっている、苦手でも良いから運動を励行する子になってほしい。体幹の強化は大人も必要な項目ですが、デジタル時代PC・タブレット使用時の姿勢など対応が家庭でも課題である。
					食育の推進(保健体育)	給食指導を通して食育を推進し、嫌いなものでも食べようとする児童を80%以上にする。	B	児童一人一人を見ると、バランスよく食べている児童は多いが、学級の残食を考えると否定的な意見になってしまう。	食育授業の実施とともに、掲示物や委員会などでバランスよく食べるよさを伝えていく。	食育に関する具体的な案、アイデアを児童・保護者・教職員から募集してみてもどうか。(特に、残食の多い食材は、こうするとおいしいとか) それにまつわるエピソードなど給食ステーションの見学や動画を見せて一人一人の意識が変わるとよいと思う。

達成状況の指標 A: 100%以上 B: 90%以上 C: 90%以下 (指標の数値に対する割合)